

# 特別寄稿・「私のライフワーク」

溝口 宏

「すへえす」は、でも九月月号に、「平和」一神足の空襲一を掲載させていたたきました。京都府、長岡京市神足に在住の読者、溝口 宏氏のライフワーク、「戦争体験の語りつぎ」に記録された「煙突の証言」が、それでした。今年、は、溝口さんご自身のライフワークについて載せさせていただきますました。

溝口 宏

一九七三年（昭和四十八年）七月二日、京都の名刹清水寺において、「京都空襲犠牲者追悼集云」がありました。十二指腸潰瘍が再発し、自宅療養中であつた私はこれに参加する機会に恵まれました。

大西良慶賞主が導師となられ、知事・市長の献花、追悼のことばもあつて、厳かに法要が営まれました。会場の成就院には、爆弾の破片をはじめ九〇数点の空襲関係資料が展示されてありました。

その中の一枚のハガキに目が止まりました。「小生は立命館の学徒として、国電神足駅の松風工業に動員してました。隣りの日本輸送機(株)の女子学徒がグラマンの機銃弾で死亡しました。記録にない戦災を後世に伝えることが、平和のために役立つ仕事だと思います。田中良三」と、記されてました。

私の鼓動は高鳴りました。朝な夕な通勤時、ただ漫然と眺めていた煙突に、こんな悲しい思いが秘められていたとは。「今、記

録にとどめておかねば……」の一文が私の胸につきささりました。よし、私がやらう、私がやらねば、むらむらと、血がおどりました。

この日創立された「京都空襲を記録する会」に入会、神足空襲の調査を担当しました。

また学徒動員中の空襲体験者と「舞鶴空襲」の調査班にも加わりました。

## 「私の戦争体験」

私は京都師範学校の予科三年生の昭和九年の夏、尼崎の日本パイプ工場に動員しました。隣りを歩いていた工員が、グラマンの機銃弾で右足大腿部貫通の重傷を負いました。搭乗員の顔が五〇年後の今も眼底に焼きついています。焼夷弾の雨の中、阿鼻叫喚の地獄を逃げまどつたこともありました。当時の阪急塚口、武庫之荘の周辺が脳裏を駆けめぐります。

終戦直前の七月十一日、舞鶴海軍工廠に配置転換になりました。走ることもどつた喜びも束の間、あの七月二十九日の大惨事にあいまして。米軍機からの一発の爆弾で、九七名の死者、三百数十名の負傷者が出ました。級友九名、京都二商三名、洛北実務女七名の動員学徒も、若い命を奪われました。

寄宿舎で二年間同室だった水嶋君は即死、今田君は片足切断の重傷、三十数年間養育を教壇に立ちました。洛北女の橋本さんは、死体置き場から救出されましたが、全盲の身となり五〇余年の人生を。私はこの日は休日だったために九死に生を得ましたが、翌三〇日

は竹林の中で、機銃掃射の波状攻撃のまつた中にさらけ出され、生きた心地のない長い長い時を過ごしました。

## 「使命」

昭和四十八年（一九七四）の夏は連日三〇数度の酷暑でした。雀が電線から墜死したこともあり、病駆をおして、神足、舞鶴を耳「ミ」口「ミ」でかけまわります。

二か月間の記録する会の調査結果は、「かくとされてきた空襲」一京都空襲の体験と記録一として、一九七四年四月に刊行されました。

京都には空襲がなかったという伝説がありましたが、老人から赤ちゃんまで、千人近い人々が殺され傷つけられた事実が明らかとなりました。また空襲犠牲者の方々に対する国家補償などを要求していく資料ともなりました。

その後記録する会は有名無実となりましたが、私はこの道こそ私の生きる道と、真実を追い求めております。戦争の悲惨、平和の尊さを後世に語りつぐ責務、亡き級友たちの靈に報いる道と、遅々たる歩みが続いています。

広島市の平和公園の「動員学徒慰霊塔」には、全国戦没学徒出身校名が刻まれています。関係資料を送付して、前記三校を追加刻してもらいました。

「語りつきたい戦争の悲惨さ」「青春を奪った戦争」「失われた青春」など、女子学徒の手記を編集しました。神足空襲に関しましては「国電神足駅周辺の銃撃」「煙突の証言」

の小冊子にまとめました。

大阪の竹村健先生のイラスト入りの「腹へこ物語」と「ほしがりません勝つまで」と共著で、「きみたち語りつぎ」これらが日本の戦争だった一を出版しました。

小・中学校で社会科学習に、文化祭には劇化して上演されたりもしました。

八月の全校登校日には、依頼があれば講演に出かけ、戦争体験を語っております。

新聞の投稿欄へは、戦争の悲惨、平和の尊さ、生命の大切さを、折々に投稿しつづけています。

## 「ライフワーク」

長岡京市は、機銃掃射で少女が死亡した七月九日を「平和の日」に制定、駅構内の「平和記念碑」(弾痕のある三煙突に献花、慰霊を行っています。平和フォーラムを開いています。

工場の十数発の弾痕のあつた煙突は、墓部を「掃りの碑」とし、銘板に由来を記して残されています。舞鶴の共業公園には鎮魂碑が建てられて十数年、毎年慰霊祭が行われてきました。生きている限りお参りをつけよう、各校の元動員生徒らは結束を固めてあります。永遠に平和な港町であってほしいと願っています。

戦後五〇年、戦争体験は次第に風化し、戦争は忘却の彼方に追いやられようとしています。「平和」こそ、後世の人たちへの大いなる遺産です。戦争体験の語りつぎは私たちが体験者の責務です。そして、私の「ライフワーク」です。